昭和六十年三月二十四日郷土研究会資料

第一三七回
史跡めぐり資料

上野不忍池周辺
下町風俗資料館
東照宮
寛永寺
六義園

主催　越谷市郷土研究会
理事　丸田冨夫

第一三七回　史跡めぐり案内

（上野周辺と六義園　歴史散歩）

とき　昭和六十年三月二十四日（日）

集合　午前八時三十分　越谷駅前

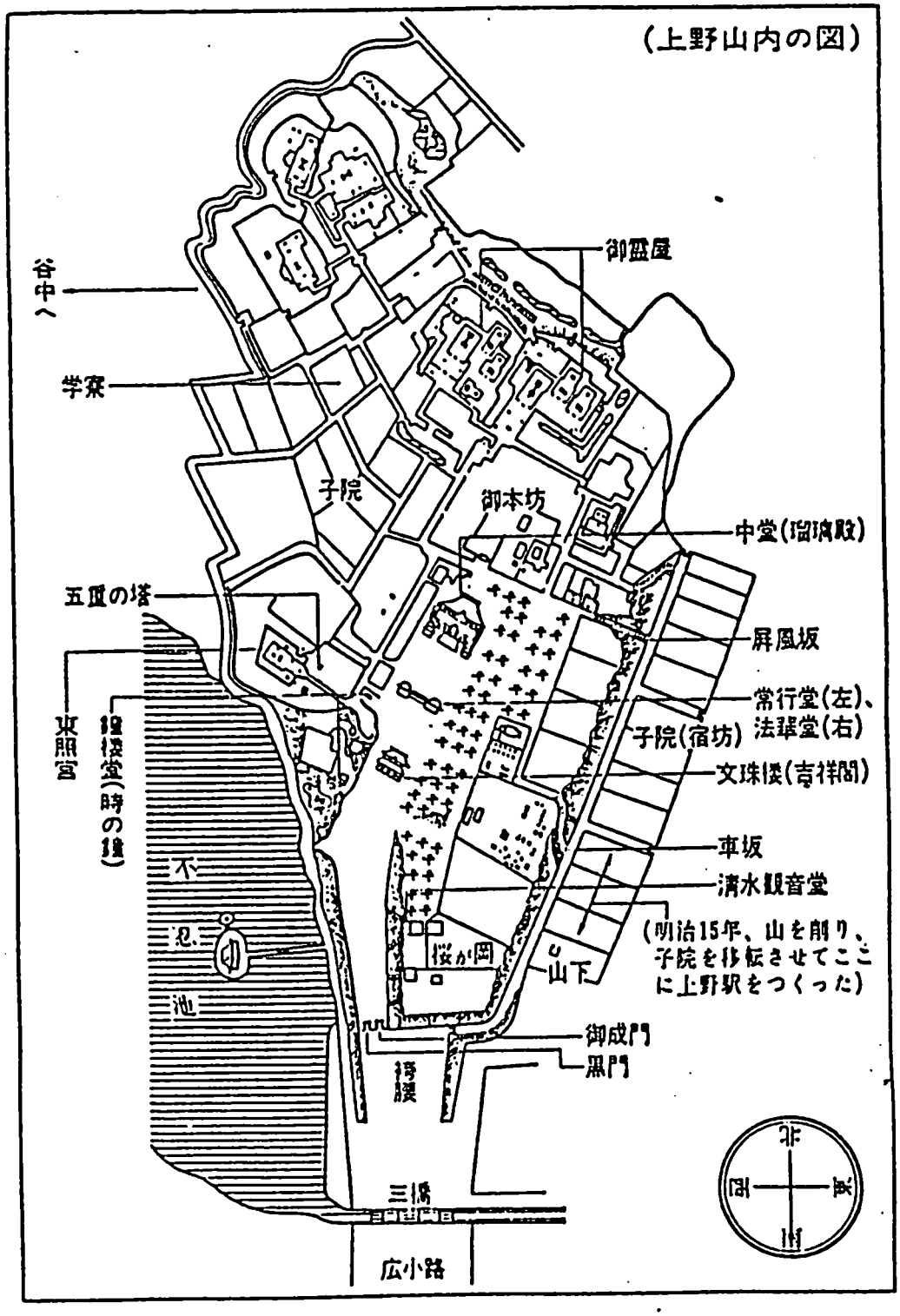
コース　越谷駅―上野駅―下町風俗資料館―不忍弁天堂―清水観音堂（黒門）―秋色桜碑―五条天神社―東照宮（五重塔）―旧寛永寺本坊表門―因州池田屋敷表門

昼食

国鉄上野駅―駒込駅―六義園

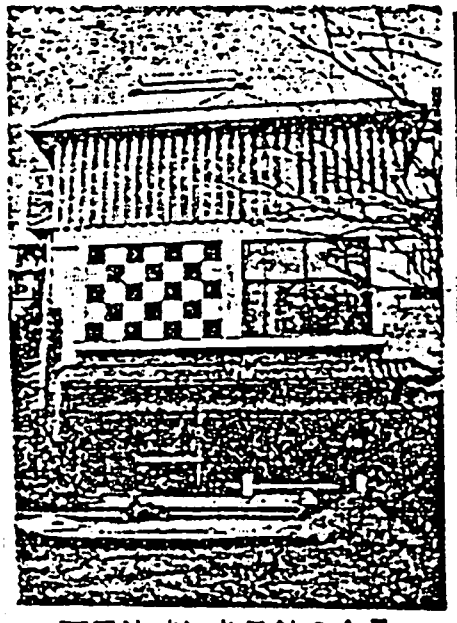
駒込駅―日暮里―北千住―越谷駅　解散

案内者　理事　丸田富夫

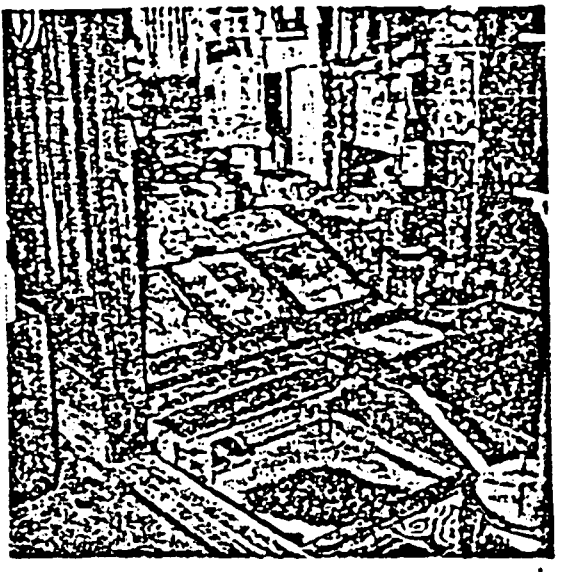

(上野山内の図)
谷中へ
学寮
子院
御本坊
御霊屋
中堂(瑠璃殿)
五重の塔
屏風坂
常行堂(左)、
法華堂(右)
東照宮
鐘楼堂(時の鐘)
子院(宿坊)
文珠堂(吉祥閣)
車坂
清水観音堂
不忍池
桜が岡
山下
(明治15年、山を削り、
子院を移転させてここ
に上野駅をつくった)
御成門
黒門
待機
三橋
広小路
北
東
西
南

下町風俗資料館

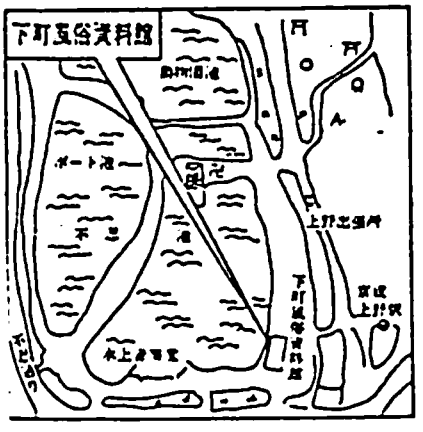
東京下町に残る風俗や文化を保存、展示し後世に伝えようと、台東区が昭和55年10月に開設した博物館である。

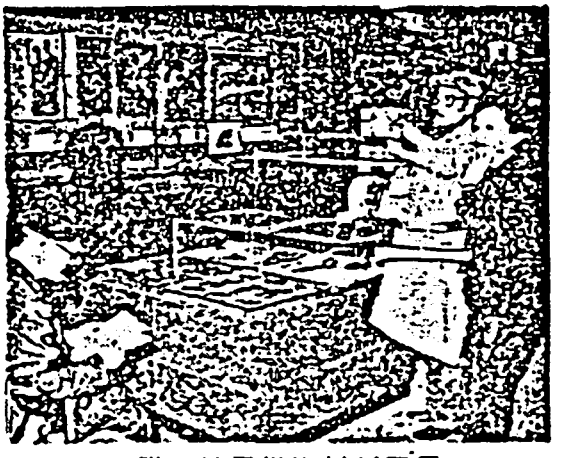


不忍池畔にある館の全景



1階の展示場には駄菓子屋





2階には風俗資料が展示

不忍弁天堂（5）

不忍池の中にある弁天堂は、寛永寺の堂宇の一つである。

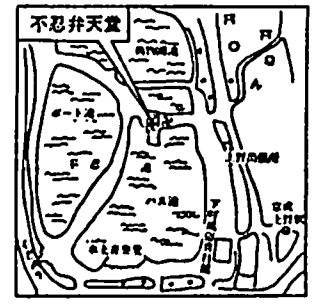
いつ建立されたか、はっきりしないが、寛永寺が創建されて間もない頃だといわれる。天海僧正が寛永寺を創建したときに、水谷伊勢守勝隆とはかり、比叡山の近江の竹生島になぞらえて、不忍池の中に中島を築いて、弁財天をまつったのが、このお堂だと伝えられている。

弁天堂の本尊は、八臂大弁財天。長寿、福得の神として広く信仰を集め、音曲の神としても有名である。

明和、安永の頃（一七六四～一七七八）この刻みて飯に和すその匂ひ大に格別也」。と、江戸末期に発刊された『遊歴雑記』には、この辺りの景色のよさや風流な蓮飯などのすばらしさを述べている。

弁天堂を配した不忍池の風致は江戸の昔から万人の愛する所であ

八角形をした不忍池の中に浮ぶ弁天堂

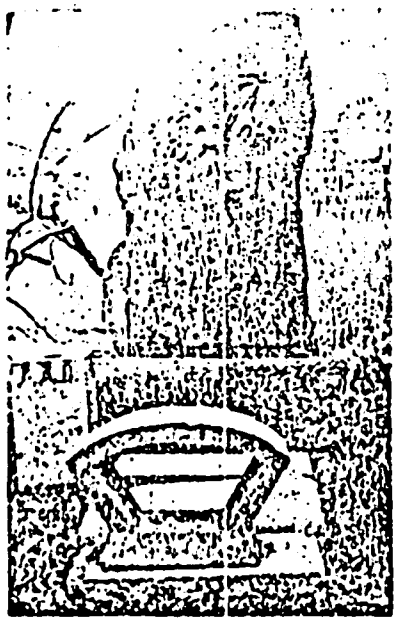


お堂のまわりには、江戸名物の出合茶屋という茶店が並び、蓮飯を売ったり、アベックのお客さんで賑わったものだ。

「この茶店に憩ひて四辺を眺望すれば、風色いわん方なし。別して蓮花咲き揃ひし頃は最色兎角の論なし。取分五月にいたれば蓮飯と称して家毎にひさぐ、但し客を待せ置つつ、舟に棹さし水中節に茎立し蓮の巻葉を採る。大正末期には参道の中程に華麗な竜宮門ができ、池の中の竜宮城を思わせたが、昭和二十年三月の空襲により焼失してしまった。

昭和三十三年、本堂を再建した。池の四方八方から見られるようにと八角形のお堂にしたといわれる。本堂天上には小玉希望画伯の竜の図がある。九月の二の巳の日は巳成金といって縁日、この日は参詣の人々で賑わう。

（上野公園不忍池）



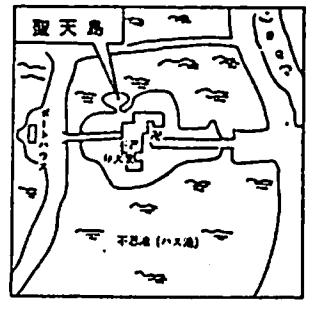
扇の形をした彫刻と碑

聖天島

上野の山からおりて不忍池の弁天堂へ行く。正面には八角の弁天堂、右側には生池院の木堂があり、弁天堂のお堂の右横をみると、池の中に突き出すように小さな島がある。この島が聖天島である。

現在、不忍池の中には大小二つの島がある。一つは弁天堂のある弁天島（または中島ともいう）とこの聖天島の二つである。

もとはといえば、不忍池の中には三つの島があった。弁天島をはさんで、聖天島の反対側、つまり、広小路方向に寛文十年（一六七〇）に了翁禅師によって経堂が建てられ小さな島が築かれたが、天和二年（一六八二）に経堂が中央の島—弁天島が一番大きな島であるが、この島が築かれたのは、寛永二年（一六二五）だといわれている。天海僧正が上野の山に寛永寺を創建したさいに、水谷伊勢守勝隆とはかって、中島（弁天島）を築いて、琵琶湖の竹生島にならって弁財天を祀ったとされている。



聖天島はいつ頃出来た島かというと、この島は人工島じゃなく、寛永寺創建以前から池中にあったものだといわれる。

いつ頃かはっきりしないがこの島には弁財天祠が祀られていた。しかしその後、大きな島が築かれたので、そちらに移っている。どうも寛永寺創建のときに弁財天を祀ったといわれているのが、これらしい。

聖天島にはそのほか寛文十年図にみられるように「稲荷の宮」「役の行者」「摩利支天」の三祠があった。しかし現在ではなくなっており、役の行者が聖天宮に変わったのではないかとみられている。

上野の山に移ったため、島がとりはられ、現在では二つの島ということである。

弁天堂のある

弁天堂横に突き出た聖天島

ともかく「江戸砂子」や「江戸名所図会」には聖天宮がむすびの神として有名だったことを記している。明治以後、聖天像は弁天堂に祀られる。この島には現在では鳥居がたち、古碑も多い。変ったものでは前からみればお地蔵さん、後からみれば男根のかたちをしたものもある。

（不忍池弁天島）

清水観音堂

天海僧正は上野の山に寛永寺をつくったときに、当時、天台宗の最高権威だった比叡山延暦寺をモデルにした。例えば寺名を年号からとり寛永寺、住職には皇室から法親王を迎える、北の叡山に対し東叡山としたことなど……。また、寛永寺周辺をみても、不忍池弁天堂や清水観音堂もチャンとモデルがある。清水観音堂は京都の清水観音堂がモデル。本堂正面を舞台づくりにし、不忍池の景色を眺められるようにした。このように天海僧正は天下の寛永寺一山を造営するためにいろいろと取り入れたのであろう。

清水観音堂は寛永八年（一六三一）に上野の山の中ほど摺鉢山に建てられた。後に元禄十一年（一六九八）九月の大火にあい、現在のところに移っている。本尊は比叡山の思心僧都の作といわれる千手観音菩薩である。堂は安永年間に改築しているが、古色そのもの、上野の戦争、大正大震災などいく度か災火にせまられながらも難をまぬがれて残り、建物は重要文化財の指定をうけている。

本堂正面は舞台造り、子育て観音の別名もある

脇仏の子育観音は昔から多くの信者を集め、子育観音の別名もある位である。本堂の中をみると、いろいろの願いをかけて奉納された千羽鶴が上からさがっていて、さらにその奥の方には人形が並べてある。子授けの願をかけて、生まれた場合や子供の無事成長を祈って人形をあずけるのだそうである。毎年九月二十五日の「人形供養」では境内で人形を焼いて供養をする行事もある。

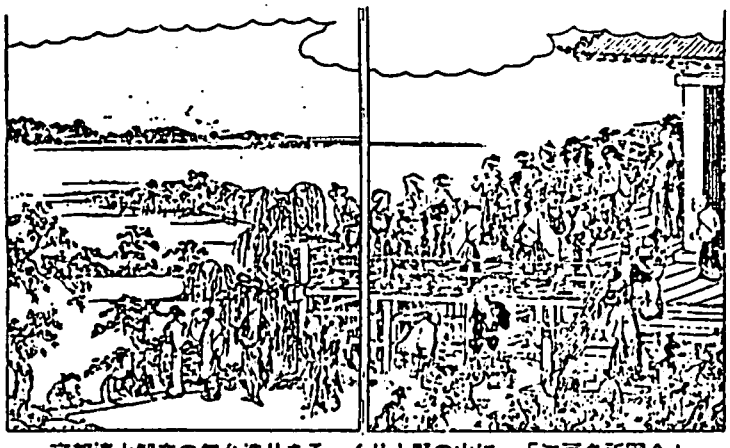
子育ての観音にちなんで、毎年五月には上野観光連盟主催により皇孫殿下の「御成長祈願祭」を催している。

堂内に掲げてある絵馬や掲額も寛政、天明期の古いもので、平家物語にちなんだ「盛久危難の図」「千手観音」などがあり、明治期の西家五姓田芳柳の描いた「上野戦争図」も人目をひく。

境内には昭和三十九年十一月に復元した「黒門」やそのほか「秋色桜」、「秋色句碑」、「人形塚」などの史跡がある。

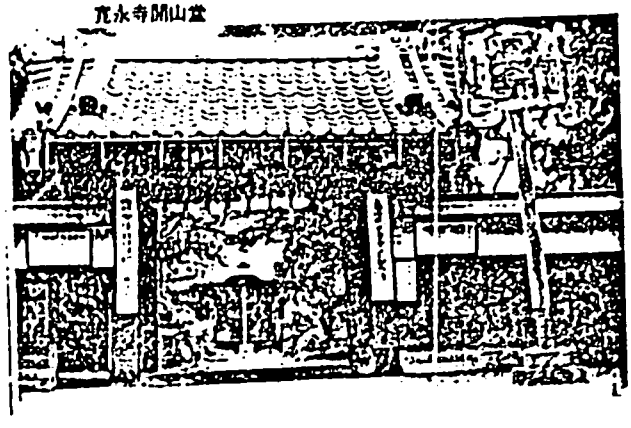
清水観音堂ぎぼし「寛永十三天推名兵印」とみえる

わずかに江戸情緒をしのばせる上野公園清水寺（清水観音堂）



京都清水観音の舞台造りをそっくり上野の山に―「江戸名所図会」

江戸の昔と変らぬ鐘の音



黒門（くろもん）

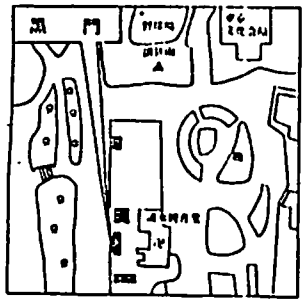
上野公園山下口から山へはいっていくと、左側に歌碑がある。

一免んの花の非盤の上野山

黒門前にかかる志ら雲　蜀山人

大田蜀山人が上野の桜と詠んだもので、山は花いっぱい、ちょうど黒門に雲がかかったようにみえるといっている。山の入口、搦腰（搦越）といわれた所にあったのが、黒門である。

黒門は寛永寺の総門として寛永二年（一六二五）に創建されている。木柵を組みあわせた簡単な冠木門で、黒く塗ってあったので、黒門といわれた。



黒門は創建以来、四度ほど火災にあって焼失しそのつど建てられている。五代目の黒門は幕末、戊辰の役、上野の戦争で最も激戦といわれた黒門口の戦いのあったところで、焼失こそしなかったが、銃の弾丸の跡がたくさん残り今でも南千住の円通寺に保存されている。

昭和三十九年十一月に地元の上野観光連盟や同町会連合会がはかり、住居表示により山諸ある黒門の町名もなくなってしまったので、旧黒門と同寸法で木製の黒塗り門を復元した。場所は当時の所よりも約三百メートル山にはいった所で、清水観音堂下である。

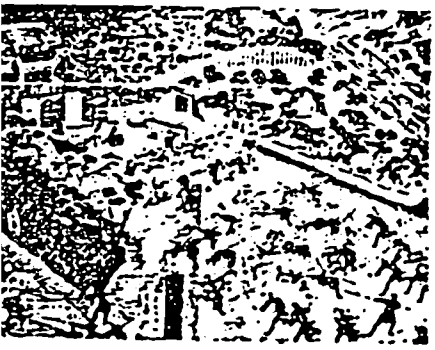
黒門に弾の跡あり山桜　子規

明治の俳聖・正岡子規が根岸で死去したのは明治三十五年九月十九日。南千住の円通寺へ黒門が山から移設されたのが明治四十年だ。子規は春がすみたなびく上野の山を散策しながら黒門をみたのであろう。

復元された黒門は誰れでも出入りは自由にでき、門をはいっていけば、清水観音堂、おりてくれば「しのぶ川」のせせらぎ。

地元の人達の熱意で上野の山に黒門を復元した。手前はしのぶ川

昭和四十年四月、地元の人たちにより、黒門の横に山米碑を建てた。「……遺跡に近い当所にこの六代目黒門を建てた。検材の肌に点々と見られる凹みは九十六年前の激戦の際、旧黒門に印された弾痕を忠実に模刻したものである」（碑文から）（上野公園内）

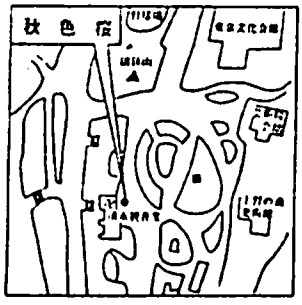


彰義隊黒門前の奮戦　英斎画

秋色桜

秋色は江戸の評判娘

ある本で読んでいたら上野の桜の満開日のことがでていた。江戸時代は四月二十日頃、大正四年は同十二日、同五年は十三日とあった。現在のように気象庁が蕾のふくらみ具合をみて開花、満開を科学的に予想するのとはいささか違うにしても、一週間ほど早まって来ている。上野の桜はこのところ、ほぼ四月上旬が見頃とされている。

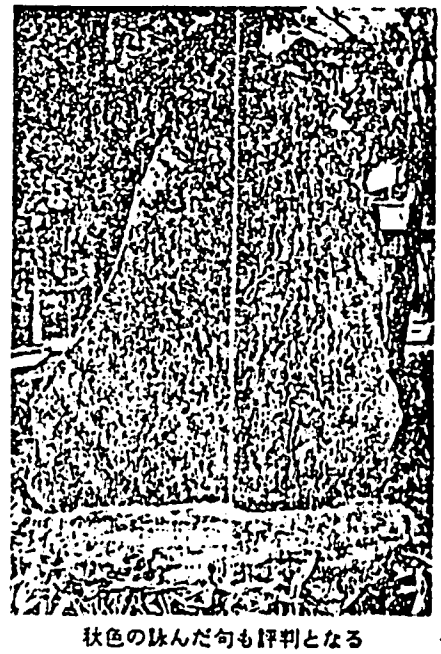


上野の山といえば江戸きっての桜の名所であった。上野は高尚、向島は粋と相場が決っていて、多くの市民から愛されてきた。それだけに上野の山には観賞用の有名桜がたくさんあった。忍岡稲荷の京桜、護国院の陀羅尼桜、黒門通り西側の匂い桜、慈眼堂の糸桜、屏風坂の吉野桜、桜が岡の秋色桜、中堂西の犬桜、清水観音の見合せ桜などである。

このなかで、現存する桜樹は秋色桜だけ、それも植えつぎ植えついで九代目ぐらいになるだろうと想像される。

秋色桜は清水観音堂の裏手にある。桜を真中に井戸と俳句の記念碑が建っている。桜は十五年位の枝垂桜である。記念碑は昭和十五年十月に聰鶯荘主人、七蜂(ななほう)居という人が建てている。碑面の句は

井戸はたの
桜あふなし



秋色の詠んだ句も評判となる

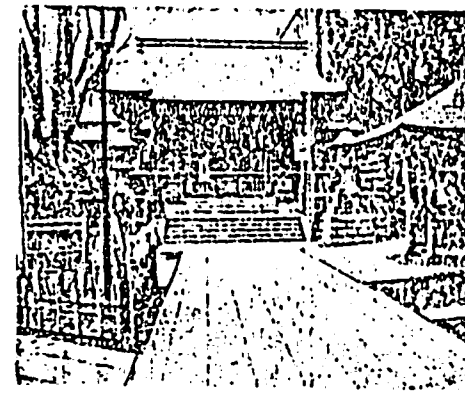
酒の酔

とあるが、これは作者ご本人の筆跡だといわれるが、その真偽のほどはわからない。読み方も「いどばたの……」とか「井戸端の……」と読んだりしている書もあるが、一般には井戸ばたの桜あぶなしと、読んでいるようだ。

さて、この句は元禄の頃、日本橋小網町の菓子問屋の娘、お秋がこの井戸端近くに花見に来た酔客を、詠んだものだ。そこでお秋は読んだ句を短冊に書いて枝垂桜の一枝に結びつけておいた。

←

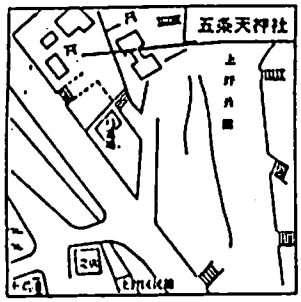
五条天神（ごじょうてんじん）うけらの神事（しんじ）



池のよく見える高台にある五条天神

区内の寺社でも節分会の行事は年々盛んになっているが、古式ゆかしい節分の行事を催しているのが上野の五条天神。「赤鬼、青鬼の逃ぐるを傍らに待ちうけた武者が桃の弓、蘆の矢で射つける。そして福助の面をかぶった長上下（ながかみしも）の男は鬼の後を追いかけざまに豆を打ちつける」（「東京年中行事」若月紫蘭著、明治四十四年刊）これは明治時代の五条天神の節分会のようすだが、赤鬼、青鬼に扮したホントの？鬼が出てきて弓矢で追い廻わされるあたりは、今でも昔と変らない。珍らしい行事である。

二月三日は節分。『福は内、鬼は外』と、かつては大声をはり上げて各家庭で豆まきをしたものだ。しかし今では豆まきといえば有名寺社の年中行事の一つとなり、それぞれ趣向をこらした催しものをやっている。



たまたまこの句を見た当時の上野の宮様であった輪王寺宮公寛法親王は、句も見事だが、筆跡も立派だと、おほめになったので、江戸中の評判になったと伝えられている。

以後、この桜を俳句作者のお秋の俳号「秋色」にちなみ「秋色桜」というようになったものである。

（上野公園清水観音堂前）

また鬼に扮するは有名人やタレントではなく、氏子でありしかも五条天神の弓道場に通う青年たちだ。この古式の節分会を別名「うけらの神事」ともいって る。

五条天神は社伝によると祭神は大己貴命（おおなむちのみこと）少彦名命（すくなひこなのみこと）、菅原道真である。

（上野公園四―一七）

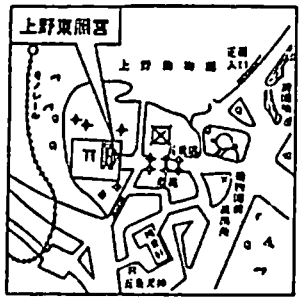
神主と鬼との問答（上）法相氏と鬼との問答（下）のすえ、鬼を追い払う

上野東照宮

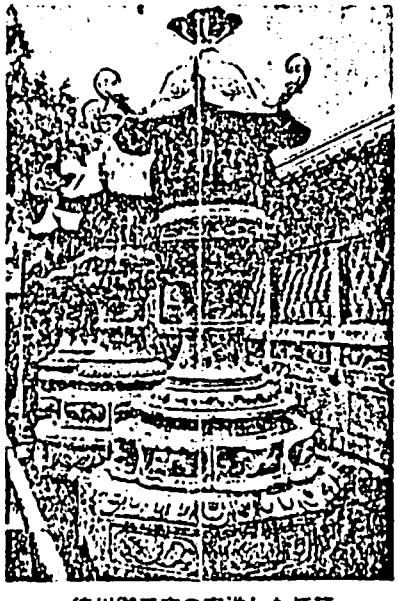
動物園の横に石でつくった見上げるような大きな鳥居が建っている。上野東照宮の大石鳥居、あるいは明神大鳥居といわれるものだ。

建立は寛永十年（一六三三）酒井忠正が東照権現のために奉納したもので、安政の大地震・関東大震災でもびくともしなかったので、基礎や構造のしっかりしていることでは学界でも驚いている。現在では重要文化財に指定されている。

鳥居をくぐって参道をいく。両側には「慶安四年、何々城主何某」の名が刻んである石灯籠が並ぶ。全くみごとである。数えて百九十五基ある。



石灯籠の裏手には桜の木がある。四月のシーズンにはおおぜいの花見客で賑う。


徳川御三家の寄進した灯籠

石灯籠の次には優美な青銅灯籠五十基（重要文化財）が並ぶ。うち六基は唐門両脇にあり徳川御三家が奉納したもので、よく見ないとわからないが他のものとは少しばかりデザインが違っている。いずれも慶安四年（一六五一）四月十七日の銘が刻まれ、家康三十六回忌の奉納である。

東照宮の祭神は徳川家康。東照宮は久能山（静岡）と日光山が有名。浅草寺境内にもあったが、寛永十九年（一六四二）に焼失している。上野東照宮は藤堂高虎により寛永四年（一六二七）造営された。高虎は家康への敬慕の念厚く、自分の屋敷内へ祠を造ったのである。その後、三代将軍家光の時代に造りかえをし、慶安四年四月に完成したのが現在の建造物である。

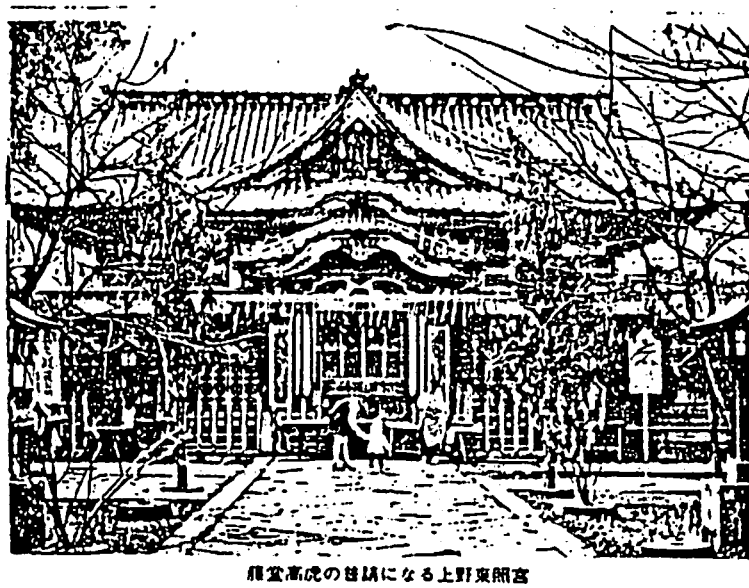
唐門　唐破風造り四脚門。日光陽明門のミニチュアともいわれ、松竹梅などの透彫は美しい。両側には上り竜、下り竜の彫刻があり、左甚五郎作ともいわれる。

透塀　唐門から拝殿、本殿をめぐらした朱塗りの格子塀。

拝殿・本殿　神社建築の代表的な権現造り。拝殿内の天井絵の「唐獅子」は江戸時代の画家狩野探幽筆。拝殿正面には「東照宮」と大書した後水尾天皇の勅額がある。拝殿の奥が本殿。拝殿と続きになっていて、銅瓦葺入母屋造りで外側は金箔仕上げで美しい。

以上いずれも重要文化財。

（上野公園内）



雁堂高虎の建立になる上野東照宮

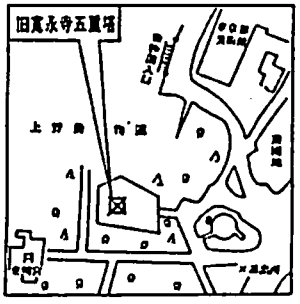
東照宮への参道

旧寛永寺五重塔（きゅうかんえいじごじゅうのとう）

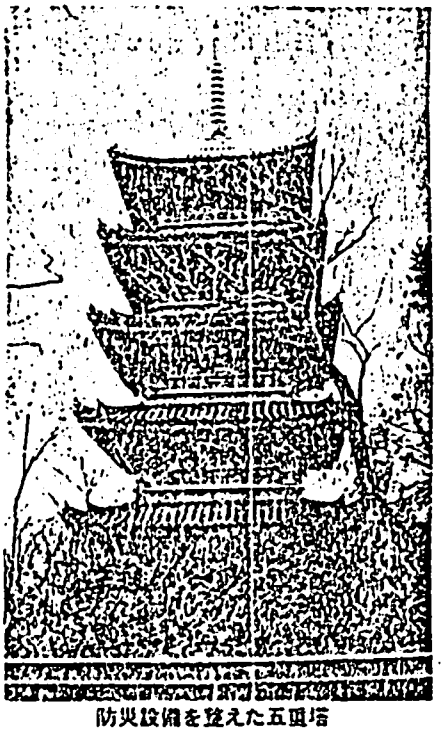
不忍池畔を散策していると、上野の森に、ひときわ頭を突き出している塔が見える。

これが上野の山のシンボルの旧寛永寺の五重塔である。この五重塔が建てられたのは、寛永十六年（一六三九）七月である。下総国（千葉県）佐倉城主土井利勝が東照宮造営にあたり寄進したものだ。

実は、この塔は土井利勝にとっては二度目の寄進で、最初のものは上野東照宮が大造営をしてから四年ほどたった寛永八年（一六三一）に建てている。しかしこの時の塔は同十六年三月に火災によって焼失してしまったので、当時、幕府の大老職にあった土井利勝は即刻、再建したのであった。一代で五重塔を二基も寄進することは容易なわざではない。利勝はそれをやってのけた。利勝は家康、秀忠、家光に仕え、名将のほまれ高く、寛永十五年には大老職についた、それだけに将軍に対する恩義を感じて二度も寄進したのであろう。



五重塔の構造は三間五層で、屋根は第五層（一番高いところ）が銅板葺きで、他は瓦葺きとなっている。高さは地上から宝珠（一番上の珠のところ）まで、三十六・三六メートル。一層の中央、心柱をかこんで、東西南北に四方四仏を安置している。薬師、阿弥陀、弥勒、釈迦の四仏。


防災設備を整えた五重塔

上野の五重塔は、他の塔に比べて優美だといわれる。それはこの時代に造られた塔は第五層以外は唐風づくりが一般的で、どちらかというと、どっしりしたごつい感じのするものだが、上野の塔は全層が和風づくりで、きれいな線と味がでていて、スマートに見えるのだという。

上野の五重塔と一般にはいわれているが、東照宮と寛永寺と所属していたものが、昭和三十三年三月に東京都に寄付され、今では動物園内の施設として保存されている。災害時の消火用水にするため塔の廻りには池をつくってある。重要文化財に指定。

（上野公園動物園内）

上野公園内に建つ寛永寺五重塔　今も昔も東京名所の一つ

秋色桜

句碑の近くに秋色桜（中央）と古井戸がある

旧寛永寺本坊表門（きゅうかんえいじほんぼうおもてもん）

（2）

どっしりした門は黒門の別名がある

うっそうとした木立の中に、ひっそりと建っている黒色をした門。

上野公園、両大師橋口に近いところ、学士院会館の前、輪王寺境内にあるのが、旧寛永寺本坊表門である。

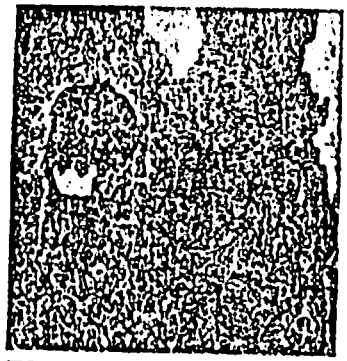
黒い色をしているので別名を黒門ともいう。よく、広小路口（広小路）にあった黒門と混同されるが、この門は寛永寺の総門に当り建立された時代も本坊表門よりは古いとされている。

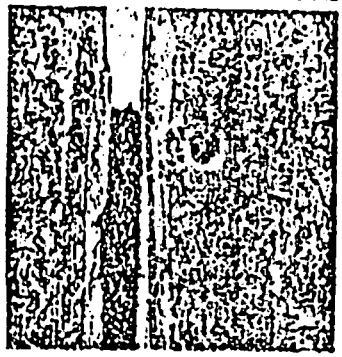
旧本坊表門の建立は寛永年間（一六二四～四四）とされている。寛永寺の本坊は創建（寛永二年）当初から一山の中心となっていたところで、元禄十一年（一六九八）根本中堂が完成するまで続く。しかし、この本坊も元禄、元文、明和、天保と四度にわたり火災にあって一部または全部が焼失している。その上、慶応四年（一八六八）の上野の戦争では本坊は五度目の災火にあい、表門を残して全焼したのである。道路からもよく見えるが、門柱や扉にはその時にうけた銃弾の痕がたくさん見られる。

見るからに、どっしりとした門である。このつくりを正しくいうと「三間薬医門、切妻造と木瓦葺」専門的でむづかしいいい方だが、つまり江戸時代に医者がよく造ったといわれる格式の高い立派な門（薬医門）のことである。門の両側には潜門がつき、これと同型の門では東京大学の赤門がある。この門は、大正大震災後に現在の場所に移築されたのだが、その前は、現在でいうと国立博物館正門の辺りにあり、明治十五年博物館が明館と同時に正門として使われていたものである。昭和二十一年十一月に重要文化財の指定を受けている。

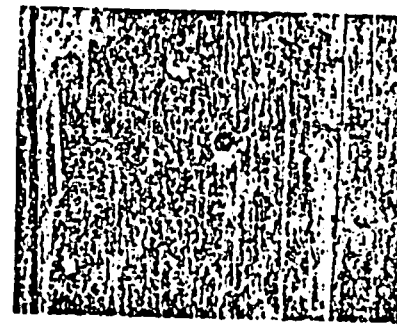
この門のあった本坊は、上野の宮様、正しくは輪王寺宮日光御門跡といっていた法親王の御座所でもあった。上野の宮は寛永寺と日光山の住職をも兼ねられ、時代によっては天台宗の座主にも就かれていた。明治維新と共にこうした制度は廃止されたが、明治以後、輪王寺を上野の山につくることになり門前に「東叡山輪王寺門跡」の石柱を建てたものである。

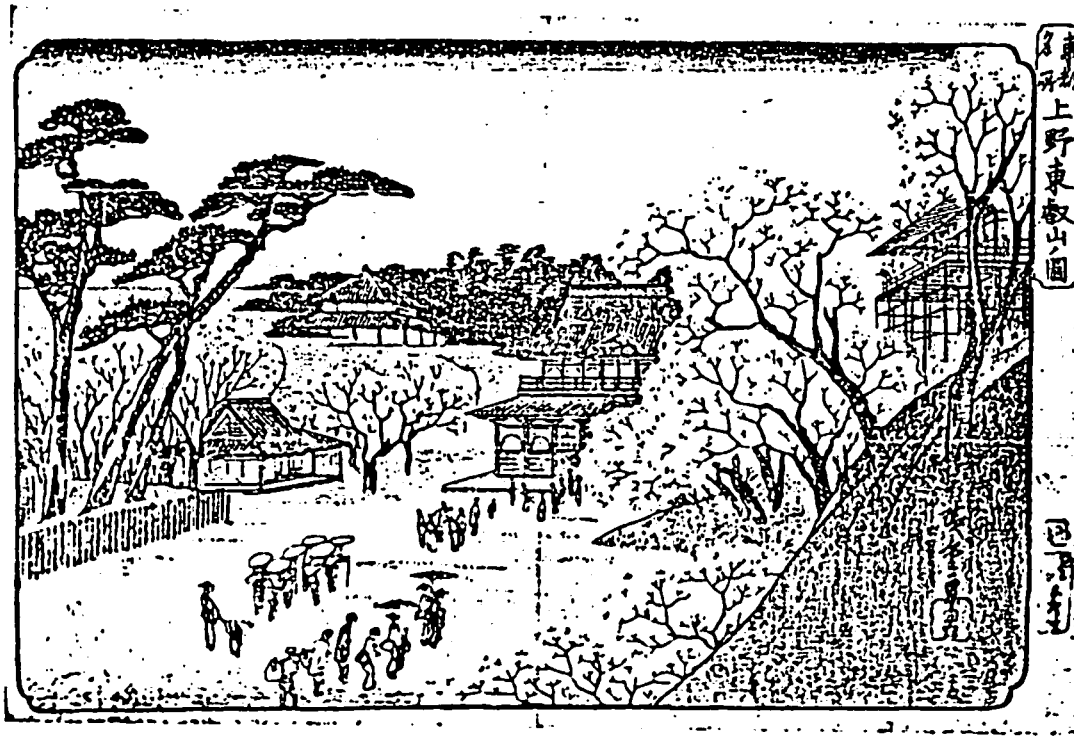
旧寛永寺本坊表門





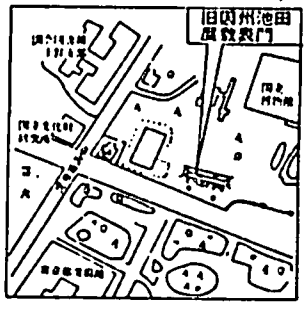
門扉には上野戦争の弾痕





旧因州池田屋敷表門（24）

がっちりとした門がまえに番小屋がつく



国立博物館の正門横に大名屋敷の立派な門がある。因州（鳥取県）池田家三十二万石の表門である。

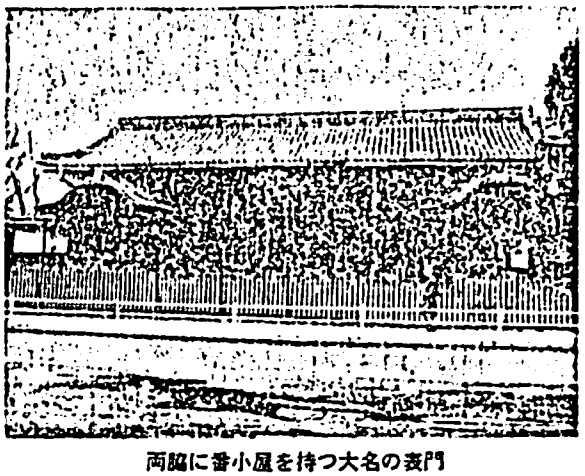
両側に出番所（門脇に出張った門番所のこと）をもち、門の扉にはぎっしり鋲釘が打たれ頑丈そのものだ。

屋根は入母屋造で、両側の出番所は唐破風の屋根をのせくぐり戸を備え、いかにも豪壮な感じのする門である。大名の門としては最も格式の高い門で、両方に出番所をつけるのは十万石以上の大名でなければ許されなかったそうである。この門の建造年代ははっきりしないが形式、技法からみて江戸末期のものだろうと推定されている。

もともとこの門は丸の内の大名小路（今でいうと丸の内三丁目あたり）にあったものを明治二十四年、港区高輪西台町に移され東宮御所の表門として使用されていたが、後に高松宮邸の表門となり、昭和二十九年に現在地に移設されている。国の重要文化財に指定。

博物館の中にはこのほか奈良元興寺別院十輪院の十輪院宝蔵（重要文化財）、春草廬六窓庵、応挙館、九條館などの重要建造物が移設されてある。

（上野公園内）



両脇に番小屋を持つ大名の表門

寛永寺

上野の山に寛永寺が建てられたのが寛永二年（一六二五）徳川三代将軍家光の時である。

家光は江戸城の艮（ウシトラ）の鬼門を鎮護するため、川越喜多院の天海僧正に命じて寛永寺を建てさせたのである。

寛永寺の建立に力を尽した天海僧正は家康、秀忠、家光と三代にわたり将軍側近として重要な位置をしめ、宗教ばかりではなく政治上でも実力者といわれた人。特に三代家光には側近あつく、寛永寺のほか日光山の造営にも参画した人でもある。

天海僧正は自ら寛永寺の初代門主（住職）となり、他の寺院に比べて全く別格な寛永寺をつくりあげていく。

まず、めったに使うことが許されなかった年号を寺の名前に使った。つまり「寛永」の年号をとって寛永寺とした。史上有名なお寺はたくさんあるが、年号を寺名としたお寺は延暦、仁和寺などほんの数える程しかない。

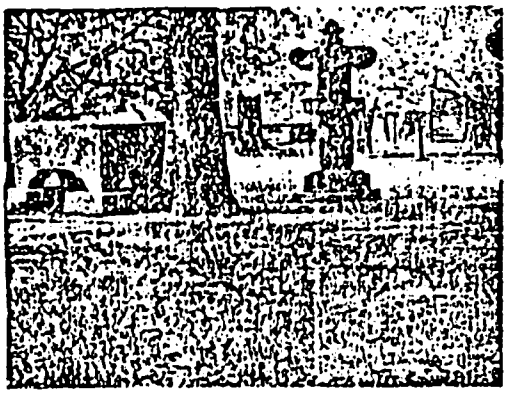
山号を東叡山といった。天台宗総本山比叡山延暦寺にならい、東の叡山とした。さらに門主も三代目からは皇族が就任し十五代まで続く。いわゆる上野の宮様、上野輪王寺宮といった方である。上野の宮様の制度は明治と共になくなってしまうが、天台宗の最高の「座主」位をもち、上野の山は実質的に天台宗の総本山の地位にあったわけだ。

このように寛永寺は徳川幕府の強力なバックアップと天海僧正の力により寺院としては最高の座をしめ、六人の徳川将軍霊廟（墓所）をもつようになり寺格はますます上る。

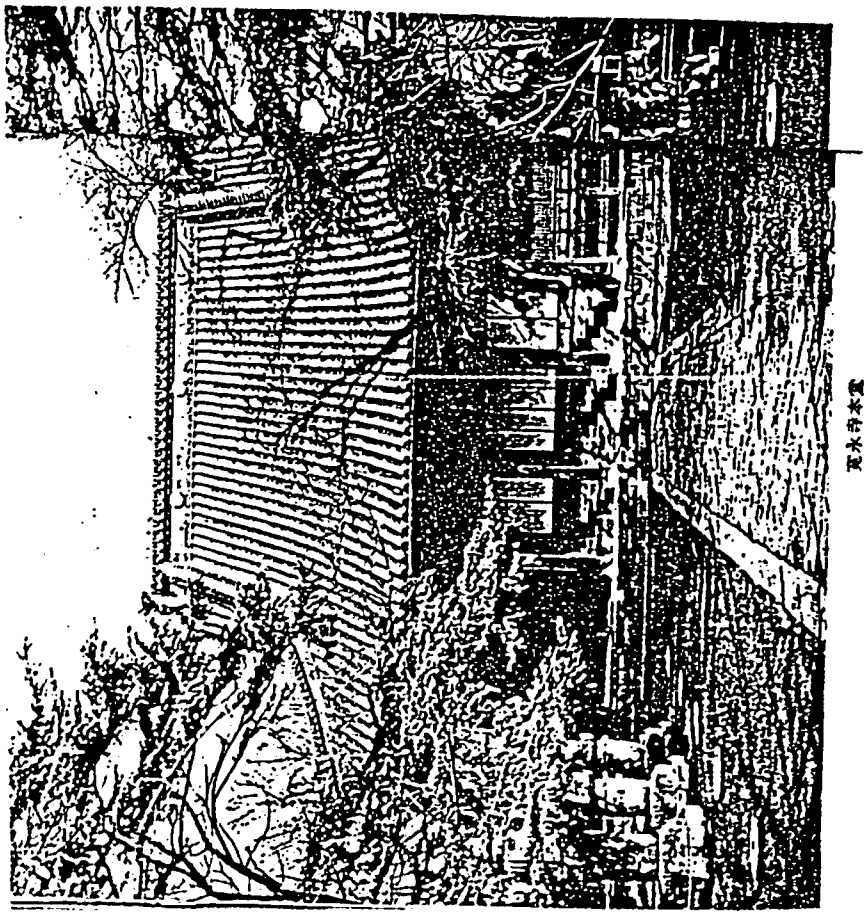
寛永寺は子院三十六坊（今は十九子院）と本坊、根本中堂、文珠楼（書祥閣）などの豪華な建物を総称したものだが、慶応四年（一八六八）五月十五日の上野の戦争（彰義隊の戦争）により殆んどの建物が焼失し、一部を残して新しく上野公園となってしまう。

徳川と共に歩んできた寛永寺も子院であった大慈院の地に明治十二年、喜多院から本地堂を移築し、本堂として現在に至っている。

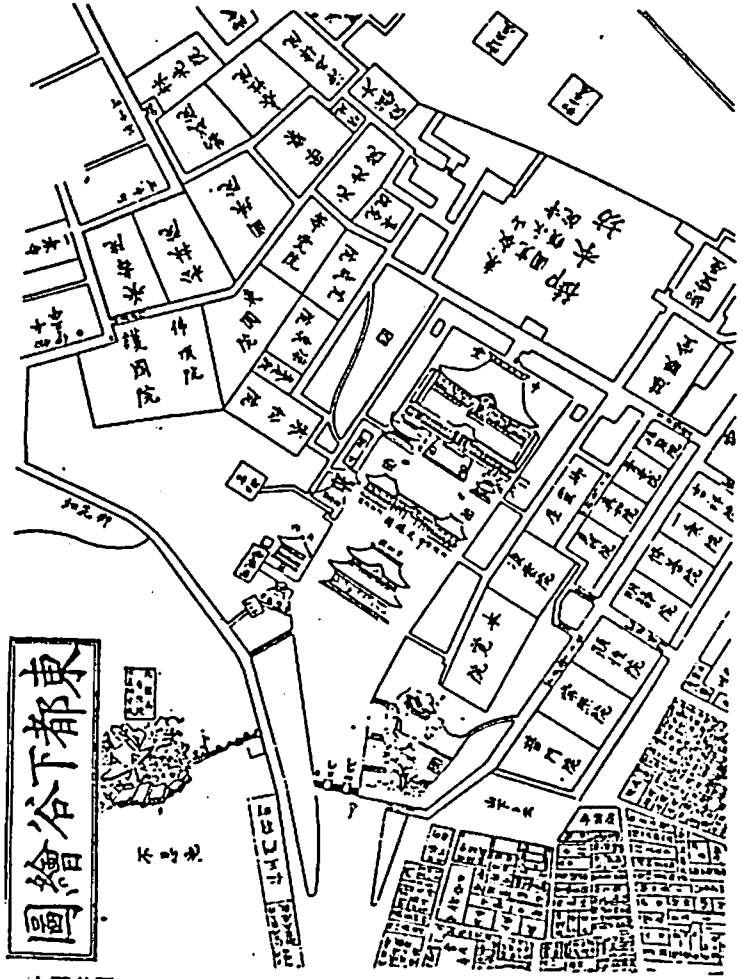
（上野桜木一―一四）



境内には史跡が多い



寛永寺本堂

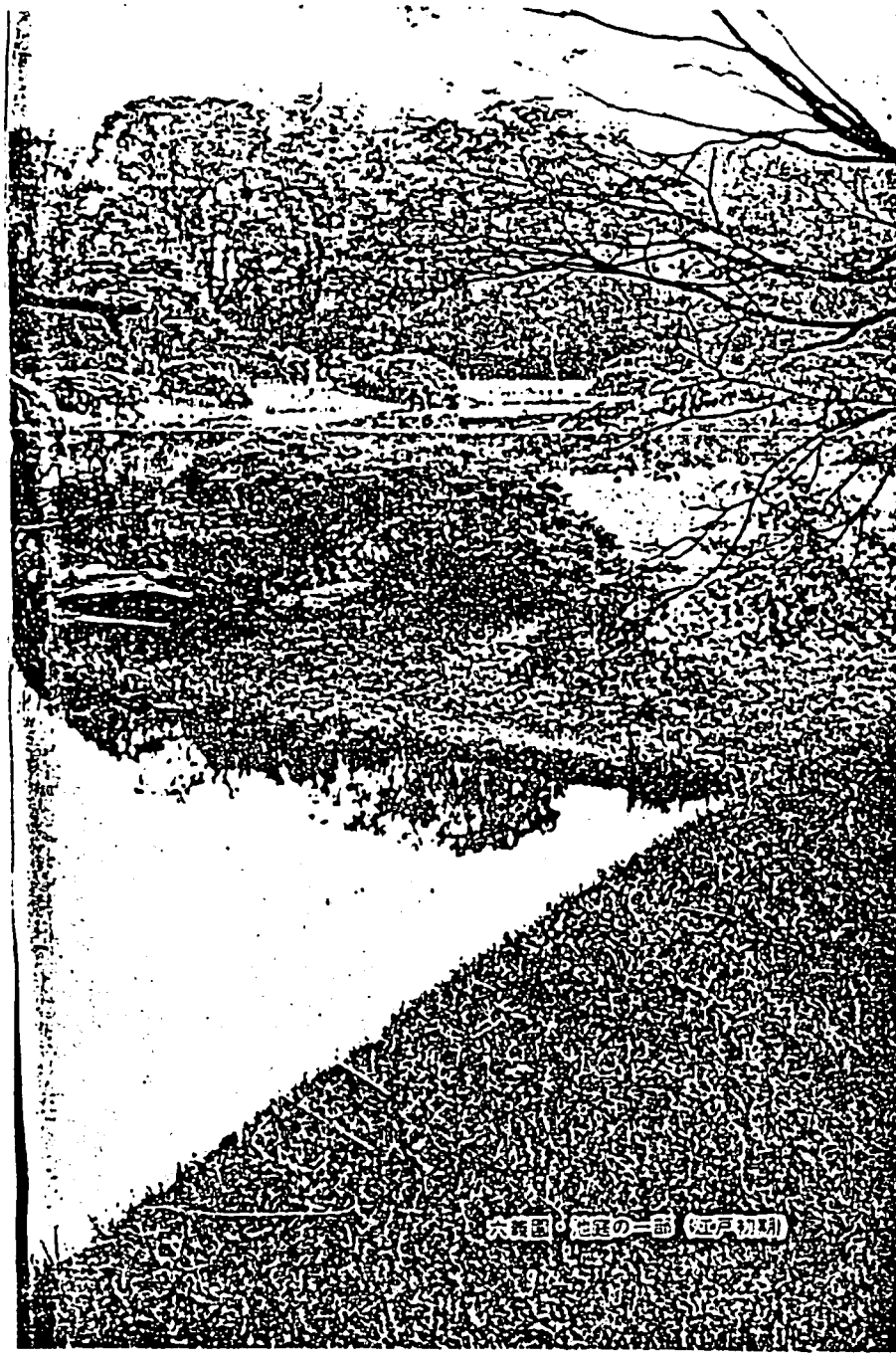


上野公園のほとんどが寛永寺の寺域であった——嘉永4年版下谷絵図
中央公論美術出版「古板江戸図集成」より

六義園（りくぎえん）

○六義園　江戸初期　文京区上富士前町

元禄八年柳沢吉保将軍よりここを賜せられ、園池乗遊に造手、大芝生地に平岡、さらに大滝界に巨大な中島石組を施し、池中岩島を配す。築山にクマザサの大刈込を用い、流れを作り滝を落とし平岡を多数配してある。保存は良好、老樹幽邃。



六義園・池庭の一部（江戸初期）

六義園

▼文京区本駒込六丁目一六
▼国電駒込駅下車

駒込駅をでて南にむかう本郷通りの大道路はもう六義園にそった通りで、右手にまわれば正門入口にでる。このあたり一帯は、江戸時代には日光街道ぞいの農村地帯で、野菜や庭木・盆栽づくりなどの近郊農村だったが、いまはすっかり都市化してしまった。

六義園

六義園は五代将軍綱吉の信任あつかった柳沢吉保が、一六九五（元禄八）年に中屋敷としてたまわったもので、いらい七年余の歳月をかけてみごとな庭園を完成した。吉保の和漢の文学趣味を反映して日本・中国の名所や歌枕などから名をつけた八八の名所をさだめ、六義園の名も四書五経などの儒学によっている。千川上水の水をひいた池とひろい芝生のなかの苑路をめぐる回遊式築山泉水の大名庭園は、水戸家の後楽園とともに国の特別名勝に指定されている。吉保は辞職後ここに隠居したが、その死後は荒廃していたのを明治一〇年ころ三菱の岩崎弥太郎が別邸として復旧し、昭和一三年岩崎家から東京市に寄付された。

池泉、地割

滝石組

六義園――この庭園の名称は、儒者荻生徂徠の意見を入れて名づけられたものといわれます。六義と申しますのは、漢詩の六種の体、即ち、賦、比、興、風、雅、頌、この六つを全部備えた完全無欠なるもの、つまり美の極致すべてを表わした庭園という意味から名づけられたものだそうです。

この庭園は、元禄八年起工され、元禄十五年頃完成したようです。長い年月をかけまして、当時川越藩主であった柳沢吉保がその別邸として築造したもので、約三万数千坪の平地に、大海原を象徴しました広大な池を掘り、玉川上水の支流にあたる千川上水の水を引き入れ、西北方の所々に小高い丘を作りまして、そこに岳、櫻、桜その他沢山の果樹を植え、遊雲門、昆沙門堂、竜華庵等の建物を適当に配置しました。

庭園内で眺めますすぐれた景色がその角度により八十八の景勝地として選び出され、それぞれに標石が立てられていたのですが現在残っているものは極少いようです。ここに建築されました別邸は六義館と名づけ、完成後には、将軍綱吉やその生母桂昌院がしばしば訪れたといわれます。

吉保の死後は荒廃したまま放置されていましたが、文化年間に復興いたしまして、明治の時代となりまして岩崎久弥氏の別邸として愛用されていたのですが、昭和十三年東京都所有となりまして、有料庭園として一般市民に公開されるようになったものです。

六義園はその地域が広大で、正面に広々とした芝生を持つ、一大廻遊式庭園でありまして、近世日本庭園の長所が十分生かされています。巨大な中島あり、灯籠、岩島、石組も巧みに取り入れられ、山上には見晴台まで設けられ、日本趣味豊かであり乍ら一面大まかな技巧に走らない手法のため、明るい近代的感覚がみられますため、現代人からも好感を持たれ親しまれている江戸名園の一つとなっているのです。

郡山城下に残る郡山城の櫓

〔柳沢家〕大和郡山十五万石

柳沢家とは、江戸の初期、五代将軍綱吉の側近として仕えた柳沢吉保の家柄である。柳沢氏は、将軍綱吉の死とともに没落したようにみえるが、そんなことはない。子の吉里は所領の十五万石はそのまま受けついでいる。吉里が甲府から大和郡山に転封になったのは、吉保の死後十年目の享保九年（一七二四）で、失脚ではない。

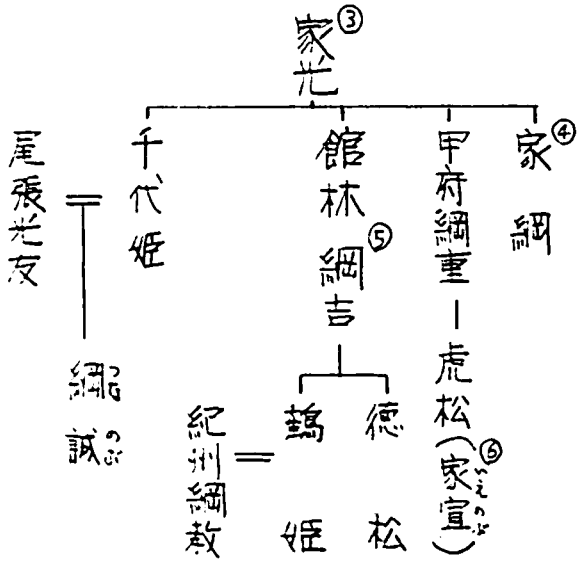
吉保の父安忠は徳川家光の弟忠長につかえたが、家が断絶したので館林藩の綱吉に仕えなおした。それが運の開ける糸口になった。

しかし、出は決してわるいわけではなく、清和源氏武田氏流で、レッキとした家柄である。発祥地は、甲斐国北巨摩郡柳沢村で、いまの山梨県北巨摩郡武川村に当る。最近は、高原野菜や蒟蒻なども盛んだが、昔は雑穀などで生活する貧しい村であった。柳沢家の精神は旧主家武田氏の滅亡や徳川忠長の断家などからくる不遇によって得られたもので、最高の権力に喰いついたら離れない処世術がみられる。

柳沢吉保略年譜

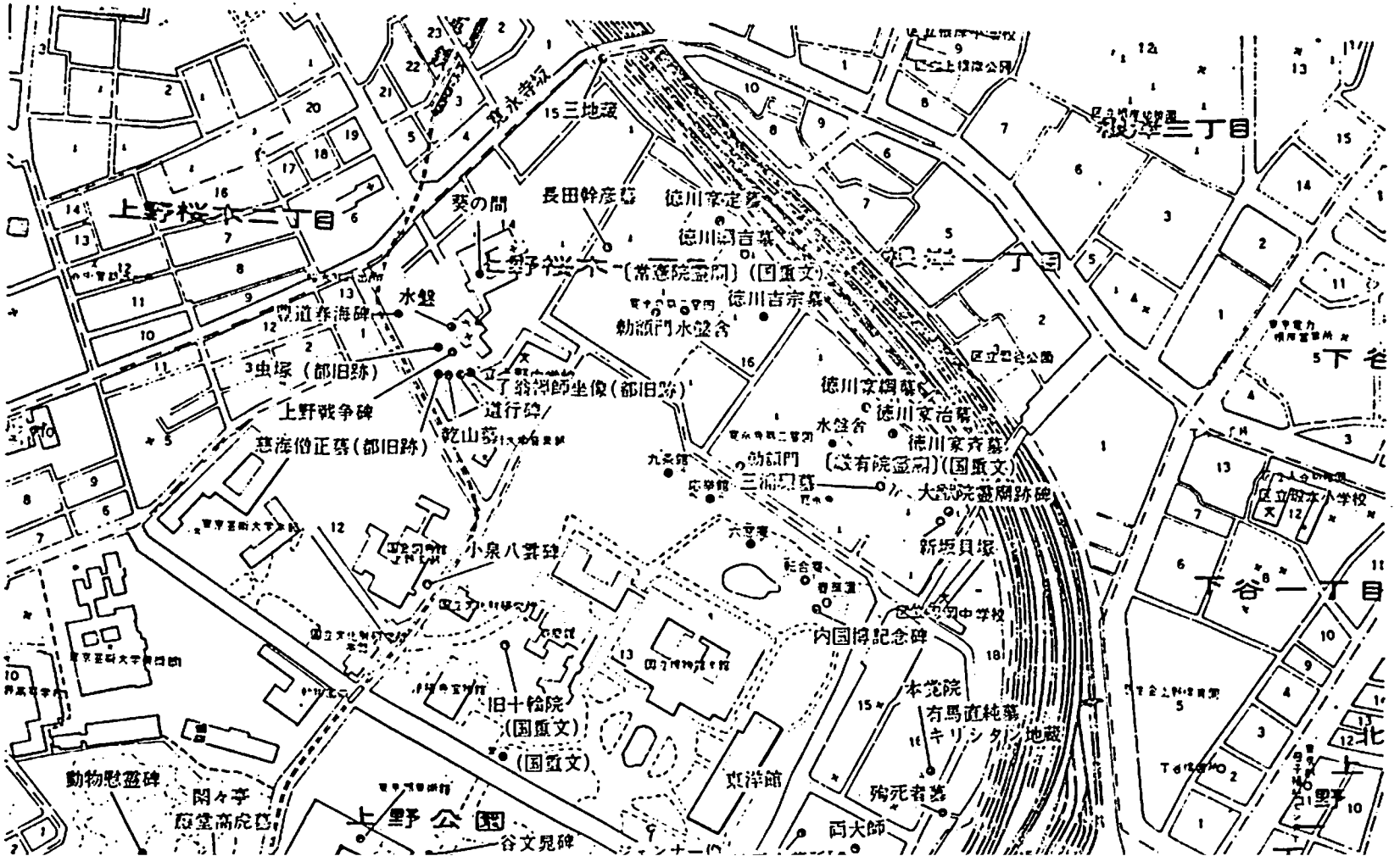
年号	年令	略年譜
万治 三年一一六五八	一	館林藩主徳川綱吉の家臣柳沢安忠の三男として江戸に生まれる。名は保明
延宝 三年一一六七五	十八	家督を継ぐ五百三十石　綱吉の小姓組番頭となる
延宝 八年一一六八〇	二十三	綱吉将軍となるに従い、旗本に列し小納戸役となる
天和 元年一一六八一	二十四	綱吉よりその儒学の弟子となることを命じられる
天和 三年一一六八三	二十六	三百石加増　都合八百三十石
貞享 二年一一六八五	二十八	二百石加増　都合千三十石
貞享 三年一一六八六	二十九	従五位下出羽守となる　生類憐みの令発令
元禄 元年一一六八八	三十一	千石加増　都合二千三十石
元禄 三年一一六九〇	三十三	側用人となる一万石加増一万二千三十石を知行して大名に列する
元禄 五年一一六九二	三十五	二万石加増　都合三万二千三十石
元禄 七年一一六九四	三十七	三万石加増　都合六万二千三十石
元禄 十年一一六九七	四十	一万石加増　川越城主となり老中格に昇進
元禄十一年一一六九八	四十一	二万石加増　都合九万二千三十石
元禄十四年一一七〇一	四十四	左近衛少将に任ぜられ老中の上に昇格する 松平姓を賜わる　改名して美濃守吉保となる

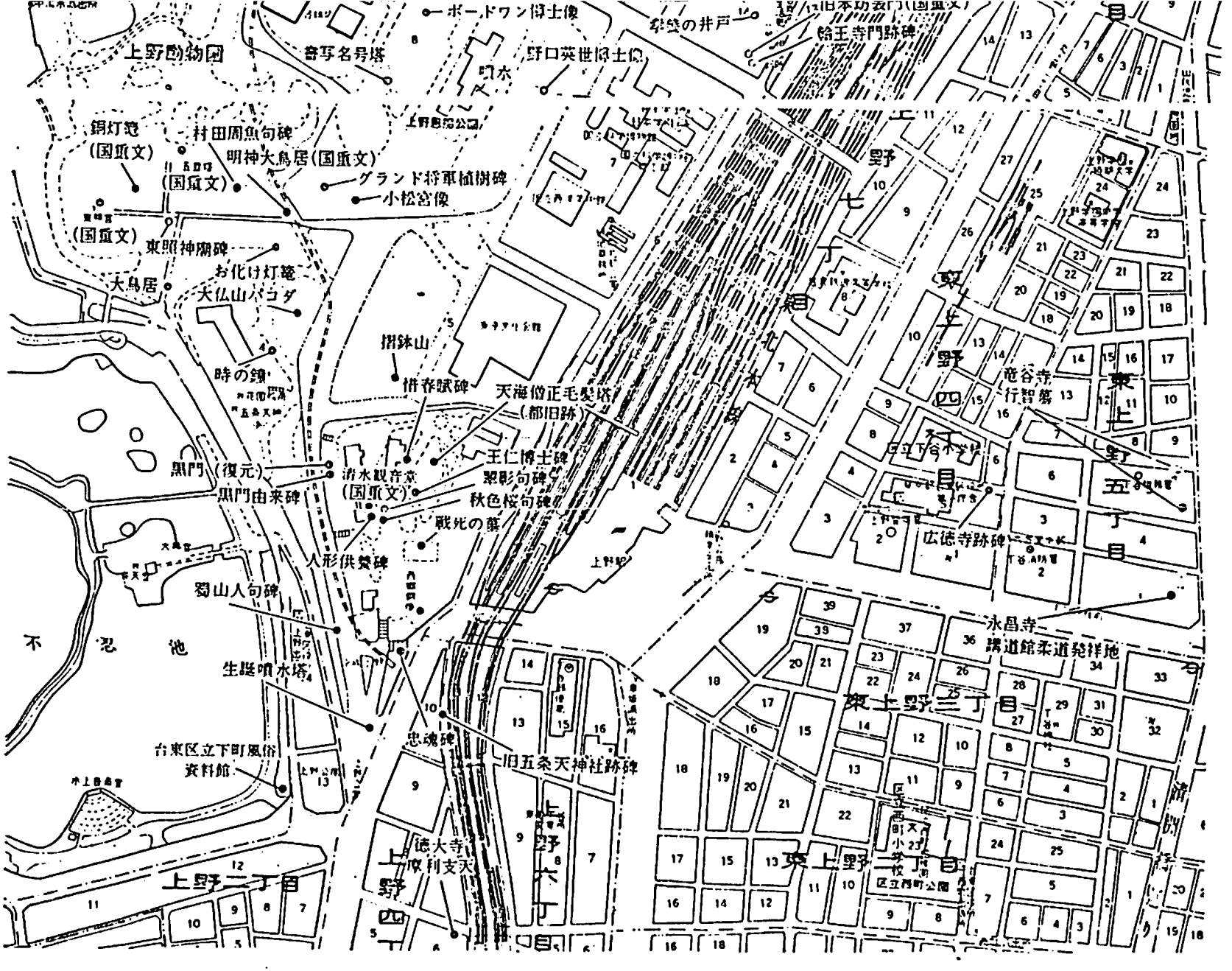
元禄十五年 一七〇二	四十五	二万石加増　都合十一万二千三十石
宝永　元年 一七〇四	四十七	この年六義園　完成
宝永　三年 一七〇六	四十九	甲府城主となる　四万石加増十五万千二百石知行す
宝永　六年 一七〇九	五十二	大老格となる
正徳　四年 一七一四	五十七	将軍綱吉死去　家督を子吉里（生母は側室の染子　綱吉の落胤説流布）に譲る 江戸駒込の別邸（六義園）にて没す



参考文献

台東区の歴史散歩　東京都台東区教育委員会
新版史跡をたずねて（したや・あさくさ）　東京都 台東区
東京都の歴史散歩（上）　東京都歴史教育研究会 山川出版社
東京の寺　徳永隆 平春　（株）保育社
全国庭園ガイドブック　庭　京都林泉協会編　誠文堂新光社刊
歴史と旅「特集」地名と苗字　（株）秋田書店


上野桜木二丁目
上野桜木一丁目
根岸三丁目
根岸一丁目
下谷一丁目
上野公園
葵の間
長田幹彦墓
徳川家定墓
徳川家吉墓
徳川吉宗墓
(常憲院霊廟)(国重文)
勅額門水盤舎
水盤
間道春海碑
3虫塚(都旧跡)
了翁禅師坐像(都旧跡)
道行碑
乾山墓
上野戦争碑
慈海僧正墓(都旧跡)
徳川家綱墓
徳川家治墓
徳川家斉墓
(慈眼院霊廟)(国重文)
大慈院霊廟跡碑
三浦貝墓
新坂貝塚
小泉八雲碑
内国博記念碑
本覚院
有馬直純墓
キリシタン地蔵
旧十輪院
(国重文)
東洋館
殉死者墓
両大師
動物慰霊碑
閑々亭
薩摩高虎墓
谷文晁碑
区立上野中学校
区立根本小学校
区立上野公園
区立根岸公園
東京電力
東京芸術大学
国立科学博物館
国立文化財研究所
東京都立高等学校
15三地蔵
寛永寺坂


上野動物園
ボードワン博士像
牛乳の井戸
旧本坊表門(国重文)
輪王寺門跡碑
寄写名号塔
野口英世博士像
明水
上野恩賜公園
銅灯籠
(国重文)
村田周魚句碑
明神大鳥居(国重文)
(国重文)
グランド将軍植樹碑
小松宮像
(国重文)
東照神廟碑
お化け灯籠
大鳥居
大仏山パゴダ
摺鉢山
時の鐘
惜春賦碑
天海僧正毛髪塔
(都旧跡)
黒門(復元)
清水観音堂
(国重文)
王仁博士碑
黒門由来碑
翠影句碑
秋色桜句碑
戦死の墓
人形供養碑
蜀山人句碑
不忍池
生誕噴水塔
忠魂碑
旧五条天神社跡碑
台東区立下町風俗
資料館
徳大寺
摩利支天
上野二丁目
上野六丁目
上野七丁目
東上野四丁目
東上野五丁目
東上野三丁目
東上野一丁目
竜谷寺
行智窮
広徳寺跡碑
区立下谷小学校
区立西町小学校
区立西町公園
永昌寺
講道館柔道発祥地